

私とパーリ仏教

水野弘元

今日は、私のために講演の機会を開いてくださいます、皆様方の貴重な時間を頂戴いたし、本当にありがとうございます。

「私とパーリ仏教」ということで、一時間ばかり話を何かするようになるといいますが、あまり専門的な話は時間が短いからできないと思います。結局は、私がどのようなパーリ語、パーリ仏教の研究にはいるようになったかということから、お話したいと思います。

私は中学は山口県にある曹洞宗第四中学校—今日の多々良高等学校—に学びました。当時の曹洞宗では、曹洞宗大学（今の駒沢大学）を頂点として、全国に四つの中学を持っていたわけです。第一が今日の世田谷高校、第二が仙台、今はなくなっていますが梅檀高校、第三が名古屋、今日の愛知高校、第四が山口県の防府にある多々良高校です。そこでは、普通の中学の教科ほかに、宗乗、余乗とって、禅学（宗

乗）と仏教学（余乗）が毎週一時間ずつあったわけです。余乗としては三年の時に『俱舍論』（阿毘達磨俱舍論）、四年の時には『唯識論』（成唯識論）を習うという風で、今日では大学に入っても『俱舍論』『唯識論』というものは、あまりやらないと思いますが、そのように難しいものを旧制中学時代に、判らないながらも学び、俱舍や唯識の専門用語などは、その時に教わったものを今でも覚えています。

中学を経て高等学校は、普通の旧制山口高校に入りました。師匠は駒沢大学に入れるつもりでいたのが、中学四年の時に腕試しに受験したら入学できたので、そのまま高等学校に進みました。高校は大学の予備校として、一般教養とくに語学を主として教えていたわけです。私は高等学校時代に文化部のクラブにはいっていません、そこで文芸雑誌を出しておりました、原稿を募集したが、なかなか集まらなかったで、結局、部員としての責任上、私も何か書こうと思って、

三年の夏休みを返上して、県立図書館で宗教とか哲学とかいろいろあさって読んだわけでありませう。それを読んでいろいろちに、学問の研究などということは、私のような貧弱な頭の者にはとても不似合であり、自分には学者になる資質も力量もないと深く感じました。しかし論文だけは、雑誌で五〇頁ほどのものを書きましたけれども、どうも自分は学者には不向きであるというように深く感じ、大学に進むことはやめて坐禅の修行にでも打ち込んだ方がよいのではないかと思つて、かなり悩みました。そこで、中学時代にお世話になつていた先生のところに行つて相談しますと、先生は、一般の常識から考へて、大学、特に東大などを曹洞宗の宗門の人で出る人が少ない時代でありましたので、何はともあれ大学だけは出ておいた方が将来のために良いであろうから、一応は進学する方がよからうと忠告して下さいました。そこで中学の先生の忠告にしたがつて、しかたなしに東大に入ることになりました。

東大は文学部の印度哲学科で、仏教を学ぶためでありませう。当時は印度哲学科の主任教授は木村泰賢先生、梵文学科の高楠先生は定年間際でした。それからパーリ語は長井真琴先生、シナ仏教は常盤大定先生、日本仏教は兼任講師でありましたが島地大等先生、こういう有名な方々がいました。大て、一番最初の木村泰賢先生の訓辞や、入学してからの授業

学に入つて研究室の雰囲気で、仏教というものが日本だけでなく、ヨーロッパやアメリカ、インド、セイロンあたりの外国の人々によつて盛んに研究されていること、仏教は漢文の仏教だけではなく、パーリ語やサンスクリットによる仏教があり、特にセイロン（スリランカ）、ビルマ、タイあたりには、現在、南方仏教とよばれる、パーリ語を中心とした仏教があることをはじめて知つたのです。私は田舎にいましたために、そういう外国人によつて研究されている外国の仏教のことなどは全然知らなかつたのです。東京へ来てはじめて、新しいことを聞いて、大変びっくりしました。中学時代は、前に述べたように、宗乗とか余乗とかを習つていたけれども、昔からの伝統的な仏教で、パーリ語、サンスクリットとか南方仏教とかは聞いたことがなかつたのです。今から思えば本當に迂闊な^{ちが}ことでした。印度哲学の研究室に入つて行き、西洋人が書いた、いろいろな仏教に関する本などを読んだりして、今までまったく知らなかつた珍しい別な世界が急に現われたので、それに対する異常な興味を持つことになり、学問をやめて僧堂行きをしようという気持ちは霧消してしまつたわけです。

大学では長井真琴先生が助教授でパーリ語の専門学者であつたので、一年の時からそれを聞きました。パーリとサンスクリットの二つを同時に学ぶのは大変だと思つたので、サン

スクリットは二年の時にはじめ、高楠先生の講義を聴きました。長井真琴先生からは、高楠順次郎先生が著わされた『巴利語仏教文学講本』によってパーリ語を習ったわけです。

私は、駒込の吉祥寺の中に梅檀寮があるということもまったく知らなかったのです。大学に入って暫らくしてから文学部の掲示板に宗門関係の東大学生のための梅檀寮があり、入寮希望者を歓迎するということが出ていたので、五月ごろに梅檀寮を訪ねてみると、室があいているとのことでした。当時の梅檀寮は、二〇人近くもいる今日とは違って、六一七人しか収容力がなかった。廃寺となっている吉祥寺の塔頭の小さな本堂に部屋が五つか六つあって、二人の合部屋もあり、先輩が六、七人いました。ちょうど一人分あいているというので入れてもらったのです。梅檀寮から東大まで歩いて三〇分ほどかかりますが、当時は毎日歩いて往復しました。

そうして、一学期のころでしょう。立花俊道先生が―後では駒大の学長を二回もやられた方ですが―梅檀寮から歩いて十分余りの距離にある白山下の指ヶ谷町の日蓮宗のお寺の境内に部屋を借りておられました。先生は駒大と早大とに教鞭をとっておられました。という機縁からか、立花先生がお宅でパーリ語の講義をなさるといふことで、一週間に一回、金曜日の晩に二時間ぐらいつつパーリ語を教わりまし

た。毎週この指ヶ谷町まで寮生五―六人が通学し、外部からの聴講者もありました。当時の梅檀寮には、後の佐藤泰舜禅師、佐藤先生は寮長で、駒大や東洋大で教鞭をとり、寮の近くに下宿されていて、なにかあるときは寮へ来ていろいろな訓誡などをしておられました。次は末永真海先生、もう早くなくなられましたけれども、この人は駒大から東大を卒業し、パーリ、サンクリットを主として研究し、駒大の講師でした。それから三沢智雄、田中栄道、杉岡規道という先輩がいました。三沢先生は後で世田谷高等学校長、鶴見女子大学長をされた方であり、田中栄道先生は、一時駒大の学監をされました。杉岡先生は、駒大で文学部長を永くやったり、北海道の苫小牧短大の学長をされた方で、いずれも故人となっています。この中で田中、杉岡の両先輩は西洋哲学専攻、その他は印度哲学科でした。すべて曹洞宗大学から東大に入っただけです。他に英文学科の先輩がいました。末永、田中、杉岡等の先輩と連れ立って、パーリ語の講義を聴きに立花先生のお宅に二年ほど通いました。立花先生は、スッタニパータのテキストをロンドンから取り寄せてその講義をなさるのでした。大変難しい韻文の經典で、先生が自分で注釈書を調べて、丁寧に講義をされるといふようなことですが、われわれの中でパーリを専門に研究する者といふことになる、末永先生と私ぐらいました。末永さんは、サンスクリットが

専門でしたが、パーリもおやりになりました。私ははじめてパーリを学ぶのですが、一方では東大で長井先生に習っているし、次第にパーリ語に興味を覚えるようになりました。その点では立花先生は主として私のために講義をして下さったともいえます。

当時の日本の仏教界においては、パーリ語の専門学者といえば、長井先生と立花先生のお二人で、二人は日本のパーリ学界の双壁とされていました。立花先生は、曹洞宗大学を卒業されてから、セイロンに四年か五年間パーリ仏教の研究に行かれ、後になってさらにイギリスに行かれ、ロンドン大学でパーリ仏教を中心とした研究を四、五年間続けられ、学位を得られた方で、それ以前にすでに『巴利語文法』を出しておられる。また後では国民文庫刊行会で出された『国訳大蔵経』の中に、かなり多くパーリ語からの翻訳をしておられます。律蔵では、犍度部の大品 (Mahavagga) と小品 (Cullavagga) との二冊、お経の方では法句経 (Dhammapada)、経集 (Suttanipāta)、長老偈 (Theragāthā)、長老尼偈 (Therīgāthā)、行藏経 (Cariya-pitaka) というようないろいろなものを、法句経以外ではおそらく、立花先生がはじめてパーリ語から日本語に訳されたものです。そういうふうで、立花先生はパーリ語の大家として広く知られていました。

長井先生は高楠門下のパーリ専門学者であります。日本のパーリ学というものは高楠順次郎先生がはじめてヨーロッパから持ってこられました。高楠先生は元来サンسكريットが専門で、東大でもはじめはサンسكريットを講ぜられたが、明治三十三年に『巴利語仏教文学講本』(A Pali Chrestomathy) という英文解説(Notes)、パーリテキスト(講本)、グロスリー(字書)の三部から成る本を書かれ、それを東京大学で講義されたのです。長井先生よりも先輩の方たちもパーリの講義を受けておられたと思いますが、パーリ語を専門にやられたのは長井先生だけです。そこで高楠先生は東大でのパーリ語の講義を後で長井先生に譲られました。長井先生はその間に、Samanatapasādika という律の注釈の序文の部分を和訳研究されて東大で学位を得られました。この Samanatapasādika は、高楠先生がヨーロッパ留学中に、その翻訳が漢訳大蔵経の中に『善見律毘婆沙』として存在するということを立証し発表されたパーリ語の律蔵注釈書で、この研究は西洋の学者を驚かせたものであります。それまでのヨーロッパの学界ではパーリ語から漢訳大蔵経の中に訳出されたものは一つもないというのが定説でありました。それを高楠先生がドイツにいるところに、漢訳の『善見律毘婆沙』を読んで、その中にパーリ文献やセイロンのことが述べられており、それは Samantapāsādika というセイロンで書かれた律

蔵の注釈と一致するということがわかって、パーリ語から漢文に翻訳されている文献が漢訳大蔵経の中にあるということを発表されて、西欧の学者たちもそれを認めることになりました。

パーリ語というものは、セイロン、ビルマ、タイ等に行われている南方仏教で用いられている聖典の言葉で、パーリ語の文献は、ロンドンにパーリ聖典協会が一八八一年に設立されました。明治二十二年ですか、リス・デヴィツ (T. W. Rhys Davids) という人がその中心となり、世界のあらゆるこの方面の学者が協力して、パーリの文献の出版をしたり、研究を出すというようなことになったのです。

サンスクリットについては、世界のいろいろな国や場所に出されていて、一か所にまとまったものがない。ロシアで出されたもの、ドイツで出されたもの、イギリスやフランスで出されたものやアメリカで出されたものもあり、インドでも数多く出されています。今日では日本でも東京や京都や名古屋などで出ており、サンスクリットの仏教文献を全部手に入れることがなかなか容易でない。このような不便を考えて、その当時のヨーロッパにおけるパーリ学の第一人者であるリス・デヴィツという人がパーリ聖典協会 (Pali Text Society = PTS) をロンドンに設立して、世界のあらゆる学者に協力してもらって、そこからすべてのパーリ聖典を統一して出す

ということになって、一八八二年から今日まで出版が続けられ、すでに一六〇冊以上のテキストが出ています。このようにして今日ではパーリ聖典協会からパーリの経・律・論の三蔵聖典はいうまでもなく、三蔵注釈書もほとんど全部、さらに歴史書その他のパーリ文献類にまで及んでいます。

Samantapāsādikā が漢訳仏典の中に訳出されていることを高楠先生が発表されたので、この *Samantapāsādikā* はぜひ、高楠先生に校訂出版してくれるようにとパーリ聖典協会から依頼があり、高楠先生はこれを引き受けましたが、なにしろ大変忙しくて、自分ではできないので、長井先生に指示して実際の仕事を命ぜられました。長井先生は長い間 *Samantapāsādikā* の原文に取り組み、校訂して両先生の共編としてパーリ聖典協会から四冊として出されたのです。(一九二四、一九二七、一九三〇、一九三四) その後、長井先生もまた忙しくなられたので、私にも手伝ってくれということ、あとの三冊分は私が手伝って出したような次第です。(一九三八、一九四七、一九四七)

さらに長井先生は漢訳大蔵経の中にある『解脱道論』という論書は南方系のもので、パーリの『清浄道論』 (*Visuddhimagga*) と深い関係にあるということをも日本の雑誌 (哲学雑誌) や西洋の雑誌 (JRAS) に出されて、最初はその説に反対する西洋の学者もいましたが、長井説の正しさが『清浄道

論』の復注によって証明されました。この事実がわかってから、西洋の人々も長井先生の説を認めることになり、長井先生はこの方面で有名になりました。あとで、長井先生はパーリ語の文法『独習巴利語文法』も書いておられますし、律の戒条の比較をした『戒律の根本』なども出しておられます。

このようにして、大正末期のころの日本のパーリ学者としては、立花先生、長井先生が有名でありました。京都には、赤沼智善という大谷大学の教授がおられて、この方もパーリ語の研究にセイロンやイギリスに留学された専門家であり、多くの立派な業績を残されています。とにかく、パーリだけの研究をするという学者は、なかなかいないもので、サンスクリットの片手間にパーリ語を学ぶ人が多いのに、赤沼先生はサンスクリットもやられました。主としてパーリ語を研究され、勢力的に熱心にコッコツと価値ある仕事を続けられました。その中には『印度仏教固有名詞辞典』とか『漢巴四部四阿含互照録』とかいうようなパーリ仏教やインド仏教の研究にはなくてはならないものがあります。しかしこれらの業績は私が大学を出た後に出版され、後でその恩恵を受けることになりました。

私は大学ではパーリ語やパーリ仏教に対して興味を持ち、特に中学時代に俱舎や唯識を学んでいた関係から、パーリの阿毘達磨哲学に大変惹かれました。南方仏教で哲学書として

一番重んぜられているものに、『撰阿毘達磨義論』(Abhidhammattha-Sangaha)" というものがあり、その英訳及び詳しい説明的序文を付したものが、"Compendium of Philosophy" (『哲学概論』) という名で PTS から出ています。それを研究室で読みまして、特に興味を覚え、自分の研究はこれにしようということに決めたわけです。そのほか、南方のものとしては、先に申しましたヨーロッパの第一人者としての、リス・デヴィツの書いたものに "Buddhist India" 『仏教のインド』とか "Buddhist Birth-Stories" 『ジャータカ物語』など多くあり、それからケルン (H. Kern) の "Manual of Indian Buddhism" 『仏教大綱』これは立花先生が日本語に訳されたのですが、そういうものを興味深く読みました。その他コプレストン (R. S. Copleston) 'オルデンベルヒ (H. Oldenberg) 'ウォレン (H. C. Warren) 等のものガイゲルの『パーリ、文献及び言語』などをむさぼり読んだものです。

そして卒業論文としては「南方仏教の心識論」(心理学説) という題で、俱舎、唯識と関連させたものを書きました。その研究をさらに続けまして、それが最後に私の学位論文となったわけです。この方面の研究は日本ではあまり行なわれていなかったのです。

大学を卒業しますと、今日もありますが、宗門の内地研究

生に採用してもらって、研究費を月三〇円ずつ三年間もらい、また、東大で文学部の嘱託という形で毎月三〇円ずつ三年間頂戴しました。このようにして大学卒業後は東大の大学院に籍をおき、宗門や文学部から研究費をもらい、また師僧からも多少はくれておりました。師僧からは学生時代にも月に六〇円ほどもらいましたが、そのころは三〇円か四〇円で生活ができたので、かなり本なども買うことができました。

そのころ、高楠順次郎先生は、私は大学の二年の時にサンスクリットの講義をお聞きしたわけですが、その翌春に停年でおやめになりました。高楠先生は日本の仏教学界、インド哲学界の大御所として、いろいろ活躍されたが、特に一番大きな仕事は、『大正新脩大藏経』の編集出版であります。

明治時代にも『縮刷藏経』とか『卍藏経』とかいうような漢訳大藏経の出版が日本で出されておりますが、これは昔からの古い組織による編集で、学問的でないために、新しく整理、組織して出されたのが『大正新脩大藏経』です。これは正蔵が五五巻、続蔵が三〇巻で八五巻、図像一二巻、目錄三巻で、全体で一〇〇巻から成る老大なものであります。このような世界的な大きな仕事を高楠先生はしておられますし、そのほかサンスクリットやパーリ等による新しい学問の導入、多くの新進気鋭の学者の養成、その他教育事業や社会的な活動もあります。日本のインド学や仏教学のために今日ま

で中心的に活躍された多くの学者は高楠先生の弟子として東大を出られた方、またはその孫弟子にあたる方であります。

このような様々な高楠先生の功績を記念するために『南伝大藏経』の出版が門弟知人の間で計画されました。高楠先生はパーリ語の辞書も出そうとして長い間努力されたが、それは日の目を見ずに終わりました。先生が望んでおられたことは、新しい漢訳大藏経の出版のほかに、パーリ語の大藏経である南伝大藏経を日本語に翻訳することでありました。これは高楠先生がヨーロッパの留学からお帰りの頃からの念願であったらしいです。そこで高楠先生が六〇歳で東大をおやめになった機会に、先生のこれまでの多くの功績を記念するために、高楠順次郎博士功績記念会というものが先生のお弟子や友人の間で設立され、そこで何をやるかを相談されたが、高楠先生の希望によって『南伝大藏経』を和訳出版しようということになったのです。そしてまずパーリ長阿舎の三四経だけを知人、門下生が分担して翻訳し、高楠先生に献呈しようということ、その献呈の式が昭和五年頃に盛大に行なわれました。長阿舎の翻訳を分担された方はお弟子以外では、荻原雲来先生、立花俊道先生、京都の羽溪了諦先生、赤沼智善先生などがあります。東大関係のお弟子としては、宇井先生をはじめ、長井先生、木村泰賢先生、それから逸見梅栄先生とか干潟龍祥先生、渡辺椋雄先

生、金倉圓照先生、中野義照先生（高野山）、山田龍城先生、阿部文雄先生（駒沢）、山本快龍先生、花山信勝先生、西義雄、坂本幸男、久野芳隆、成田昌信、寺崎修一、石川海浄、小野島行忍、青原慶哉、平等通照の諸氏があり、私も末輩として中に入っております。辻直四郎先生と宮本正尊先生は外遊中のため分担者に加わっていませんが、後の翻訳は分担されています。

『南伝大蔵経』は六五巻七〇冊として出版されたのでありますが、それは『大正蔵経』の出版が終了した昭和十年から『大正蔵経』を出した大蔵出版社によって引き続き刊行されることになり、『大正蔵経』と同じように毎月一冊ずつを出し、七〇冊の出版が完了したのは七〇か月後の昭和十六年初頭でありました。『南伝大蔵経』の翻訳に従事された方は、パーリ長阿含翻訳分担の二〇数人のほかに、さらに二〇数人が加わります。駒沢大学では末永真海、増永靈鳳、東元（慶喜）先生などがあります。このようにして全体で五〇人ぐらいの人が協力して、翻訳を完成させたわけです。

私もいろいろ翻訳を依頼されました。スッタニパータ（Suttanipāta）『経集』、スッタニパータの注釈書としてのニッデーサ（Niddesa『大義釈』と『小義釈』）それから、哲学書としての“Visuddhimagga”『清浄道論』、私が最初に学んだパーリ阿毘達磨としての“Abhidhammattha-saṅgaha”

『撰阿毘達磨義論』とか、その他『本生経』の一部とかいうようなものを訳しました。

ところで大学院の三年目の五月に私の指導教授でありました木村泰賢先生が心筋梗塞で急逝され、その十日後に私の師僧も亡くなったのです。私は師僧の危篤で長崎県の寺に帰省中に木村先生の亡くなられた電報を受け、上京することもできず、やがて師僧も五月二十六日に亡くなり、一週間をすぎた。東京では、木村先生のお宅を弔問することができず、方々が四十九日まで毎週夕方集ってお経を読むというようにされていて、私も一か月すぎぐらいから参列することができました。そうして四十九日の法事の時に林屋友次郎という先生から話しかけられ、誘われて、麻布の広尾にあった林屋氏のお宅に伺い、これが後々まで林屋先生と親しくなる機縁となりました。その際に先方から私に対して三菱の岩崎家から研究費をもらってやろうと話しかけられました。林屋先生は木村先生から私のことをよろしくと申しておられたのではないかと思います。私としては学問と宗門の師を同時に失い、途方にくれていた時で、林屋氏の話に驚き且つ喜ぶという状態でした。

林屋先生という方は、慶応の理財科を出られた実業家で、第一次大戦後に、鉄鋼がわが国に不足していたので、東京鋼

材会社という会社を設立し経営していたが、世の中は次第に不景気になって、東大を出ても就職がなく、幼稚園や小学校の先生になった人さえ多かった時代です。不況が続いたために林屋先生の鋼材会社も経営不振で赤字が続き、三菱に泣きついて、この会社を買い取ってもらったわけです。林屋先生は非常な信仰家で、特に聖天さまの信仰を熱心に行っている人で、その信仰のおかげで倒産会社を救ってもらったと信じているのです。真剣に信ずれば自分の願いはかならずかなえられるという信念をもっておられて、会社の危機の際には毎日浅草の観音様の裏の方にある待乳山の聖天様に、どんなにおそくなってもお参りし、また自宅でも祖先の霊や聖天さまに朝晩かならずお参りし、お経を上げるといふ熱心さです。その信仰のおかげで、ぼろ会社を三菱に買ってもらって、それはあとで三菱鋼材会社となって栄えていったのです。

林屋氏はこれを機会に実業界から足を洗い、三菱あたりの援助で仏教の学問研究に転向することになったのです。一つには自分の信仰を学問的に研究し、仏教を実業等の実際面にも役立て、仏教の教えが世俗の生活や社会科学などの指導原理となることを確信し、これを学問的に探究したいという意欲があったと思います。しかしまず学者としての業績や肩書を得るために、私がお会いした時は駒沢大学の教授（実際には無給の時間講師）として、予科や学部で教鞭をとり、漢訳

仏典の目録としての経録の研究を始めておられました。私が駒大に就職する以前のこと、林屋氏とはその後第二次大戦中まで直接間接に経済面でもお世話になり、また人生観においても教えられることが少なくありませんでした。

よく人の世話をする人で、一流の仏教者とも交際して教えを乞い、学者の経済的援助もかなり仲介されていました。駒大講堂棟の建築の仲介、東大仏青会館建設のための寄付勸募、永平寺負債整理の世話、待乳山聖天本堂の震災後の復興や信者獲得の援助等々、種々の方面で助力を惜しまなかった。個人的にも、自分が交際する相手は老若男女を問わず、すべての人に自分と交際してよかったと思わせ、損をしたという思いをもたせないように、常に心掛けていると話しておられた。つまり菩薩の態度であります。

林屋友次郎氏とは二十年以上も交際し、物質的にも大きな裨益を受けました。ある意味では私が今日あるのは林屋氏のお蔭だともいえます。林屋氏に関しては語るべきことは数限りなくありますが、省略します。私は大学卒業後、梅檀寮が権利として持っていた世田谷中学（今日の高校）の教諭の椅子を引き受けさせられ、週に五―六時間の時間講師的な教諭を七年間ほど続け、昭和十年から駒沢大学の予科でパーリ語を二コマほど受け持つことになりました。その頃は南伝の翻訳や自分の研究で追われていた時です。林屋氏の仕事の手伝

いをしたり、渡辺棟雄先生に頼まれて国訳一切経の中の『阿毘曇心論』『阿毘曇心論経』『雜阿毘曇心論』『阿毘曇甘露味論』『入阿毘達磨論』等の国訳を手伝ったりいたしました。

南伝大蔵経の方は毎年二冊前後ずつ翻訳することにして、訳料は月給のようにして月々貰っていました。もっとも苦心したのは『清浄道論』三冊です。PTS のテキストが七〇〇余頁、その英訳も出ているが不明の点が多いので『清浄道論』の復注 *Paramatthamañjusa* を参照しなければならぬ。『清浄道論』と同じほどの長さのもので、ローマ字本はない（今日も未出版）。そこでタイ文字の王室版、ビルマ文字の刊本を参照してローマ字のテキストを作り、これによって難解の文や教理を理解することができました。また『清浄道論』の文章と一致対応するパーリ文がパーリ三蔵の注釈書、例えば『法集論』の注書 *Atthasālinī*、『分別論』の注書 *Sammohavinodanī* 等の中に一二〇頁にもわたる類似の文章があるので、それらをも参照する必要があります。これらについてはすべて『清浄道論』の訳注の中に述べておきました。

Suttanipāṭa（『経集』）は学生時代に立花先生から講読を受けていたことが役立ち、*Suttanipāṭa* の部分的な注釈としての『義訳』（*Niddesa*）では『大義釈』（二冊）の部分は PTS 本がありました。『小義釈』（一冊）の原本は PTS 本は役に立たず、タイ王室本のものをもローマ字化してテキスト

を作り、これを国訳しました。また『撰阿毘達磨義論』*Abhidhammatthasāṅgaha* は前に述べたように英訳がありますが、これを国訳するには不明な点もあり、詳しい復注の *Abhidhammathavibhāvanī* をタイ本からローマ字化し、これを参照して翻訳をいたしました。

ところで南伝大蔵経の刊行が終わりに近づき、私も自分の受け持ちの翻訳を終わることになりました。さて南伝六五巻七〇冊には各冊の巻末に索引が付いているが、訳者によって索引に繁簡の差があり、問題点も異なっていて不揃いであり、全体としてのまとまった索引とはならないので、学問的立場から統一的総索引を編集する必要を痛感した私は、大蔵出版社に交渉して総索引を作ることに話をまとめ、カードや編集費用も出してもらうことになりました。私はまず七〇冊の全文を読んで、必要と思われる語句に横線を引き、それに従ってカードを取るとともに、一人では到底できないので、昭和十五―十六年頃に予科でパーリ語を教えて成績のよかった駒大学生の横井雄峰、古崎天栄の両君にカード取りを依頼し、また一部分は大蔵出版に勤めて『彌蘭陀王問経』の国訳をされた東北大出身の金森西俊氏にもお願いしました。そして昭和十七年頃には六―七万枚のカードの整理が一応終了しましたが戦争で出版ができず、戦時中には保存にも苦勞をいたしました。幸い戦災を免れることができましたが、なかなか出版が

できず、その後十数年してやっと日の目を見ることができ
ました。

南伝の翻訳以前に遡りますが、私は大学卒業後パーリ仏教
の教理を研究することを目指していました。パーリ仏教には
漢訳仏教と違った独特の教理があり、それがa)パーリ阿含
経、b)先駆的アビダルマ(『無碍解道』『義釈』等)、c)根本
アビダルマとしての七論、d)註釈の先駆的文献(Nettipa-
karaṇa Petakopadesa Milindapañha)、e)三蔵注釈書、特に
『清浄道論』の教理、f)これを整理した教理綱要書(Abhi-
dhammatthasaṅgaha)の学説というように、千数百年にわた
って幾段階にわたる展開発達が見られます。これらの発達を
文献の上から、またその文献に述べられている学説の上から
論述したものが、昭和九年に『仏教大学講座』の中に収めら
れた拙著「南方上座部の論書解説」であります。当時の日本
ではパーリ仏教の教理を研究する人もなく、また『南伝大蔵
経』刊行以前のこと、文献の翻訳解説のないものも多く、
南伝の翻訳がある今日でもなおあまり知られていない状態
であります。

因みにこのような教理や文献の研究の副産物として、例え
ば「パーリ聖典成立史上における無碍解道及び義釈の地位」
(昭和十四・十五年)とか、ずっと後に出した「Milinda 問
経類について」(昭和三十四年)「Petakopadesa に ついて」

(昭和三十四年)などの論文ができました。

『南伝大蔵経総索引』の編集整理が終った頃に、林屋友次
郎先生の勧めで私の主論文をまとめることになりました。資
料は今までにほとんど集めているから、これを整理していけ
ばよいので、一年余で『パーリ仏教を中心とした仏教の心識
論』の原稿四〇〇字詰一八〇〇枚ほどのものを昭和十八年頃
に脱稿することができました。戦争はますます熾烈となり、
これが東大で審査されて学位を受けたのは戦後の昭和二十四
年春のことでありました。この論文の出版は『南伝大蔵経論
索引』三冊その他の緊急を要する諸出版を終えた昭和三十九
年となり、後の昭和五十三年に改訂版を出しました。

さて戦時中は大東亜共栄圏と称し、東南アジア方面に進出
するためか、慶応義塾大学では昭和十七・八年頃に語学研究
所を発足させ、慶応外国語学校として東亜諸地域の言語を中
心として授業することになりました。辻直四郎先生は梵語、
私はパーリ語によって研究所員に加えられ、パーリ語の授業
などもいたしました。この研究で昭和二十三年に『語学論叢』
第一輯を出しましたが、その中にパーリ語等の関係の論文と
して「仏教聖典とその翻訳」という拙稿を掲載しました。

次に昭和二十三年の夏、東大で長井先生の後を受けてパー
リ語の講義をされていた山本快竜氏が亡くなられたので、九
月からは山本講師の後任として私が推挙されることになりま

した。また山本氏は慶応義塾大学でも常盤大定先生の後を受けて印度哲学を講ぜられていたので、九月から慶応でもその後を引き受けてくれとの依頼がありました。従来語学研究所や外国語学校に関係していたからでありましょう。

同じ頃に市河三喜博士を首班として研究社から『世界言語概説』上下二巻を出すことになり、私もその上巻（昭和二十六年）に「パーリ語及びプラークリット」の解説を受け持つことになりました。

駒大をはじめ東大等でパーリ語を講じて不便を感じたことは適当な文法書や読本がないことであります。文法書は長井先生の『巴利語独習文法』があるけれども簡単にすぎるし、立花先生の『巴利語文典』は絶版になっており、また伝統的な古い文法で梵語との関連もありません。そこでパーリ研究の歴史や出版書、参考書等をも付録した『パーリ語文法』を昭和三十年に出版しました。また読本も高楠先生の『巴利仏教文学講本』が出版できない事情にあったために『パーリ語仏教読本』を翌三十一年に刊行しました。

さらにパーリ語辞典にも適当なものがなく、パーリ研究の学生は困っていたので何とかしたいと思うけれども簡単にできるものではありません。高楠先生の講本には字書が付いているが前述のように出版できない事情にあり、且つ簡略にすぎます。高楠先生は数十年前からその必要性を感じ、最初は

長井先生とともに編集に着手され、その後、山田竜城、山本快竜氏等の助力によって殆んどその原稿も完成しており、いよいよ出版されるという話も戦後間もない頃にありました。が、種々の事情でこれも刊行が困難となりました。私も一度原稿を拝見したことがありますが、それほど詳しいものでもありませんでした。また雲井昭善氏も『巴和小辞典』を出されたが、主として高楠先生の講本字書を受けたもので、やはり語彙が足りない。私は『南伝大藏経総索引』の第二部にパーリ語の辞書的な語彙を集めているので、これを参照し、パーリ三藏聖典が読める程度の初歩的な辞書として『パーリ語辞典』を昭和四十三年に漸やく出版することができました。が、パーリ注釈書等を読むには語彙が不足して十分ではありません。これを補って中程度の辞書を作りたいと思っていますが、恐らく現在では時間的にも年齢的にも不可能となるのではないかと思っています。

次にパーリ仏教に関係した論文としては、漢訳関係のものに「善見律毘婆沙とサマンタパーサーディカー」（昭和十二年）や「解脱道論と清浄道論の比較研究」（昭和十三年）、「Arthapada Sūtra（義足経）について」（昭和二十六年）、「ウダーナと法句」（昭和二十七年）などがあり、また歴史関係のものに「初期仏教の印度に於ける流通分布に就いて」（昭和十八年）、「仏教を中心としたセイロンの歴史」（昭和

二十七年)、「仏教の分派とその系統」(昭和三十四年) などがあり、教理関係のものに「仏教に於ける色(物質)の概念について」(昭和二十五年)、「施設 Paññatti(概念)について」(昭和三十五年)、「縁 Paṭṭhāna について」(昭和三十七年)、「原始仏教および部派仏教における般若について」(昭和四十年) 等があります。

私の本来の研究分野は上述のように、パーリを中心とした原始仏教や部派仏教であり、精々インド仏教であるということができます。この関係の著述としては『印度仏教史の性格』(昭和二十七年)、『原始仏教』(昭和三十一年)、『釈尊の生涯』(昭和三十五年)、『仏教の基礎知識』(昭和四十六年)、『仏教要語の基礎知識』(昭和四十七年)、『人生の道しるべ』(昭和四十四年) 等があります。

しかし他方では専門外ながら中国仏教も多少かじりました。それは林屋友次郎博士の学位論文『経録の研究』や副論文『訳経史研究』の手伝いを十余年にわたってして来たからであります。そのために仏典の漢訳、すなわち訳経関係にも興味をもちました。訳経史を調べるためには『出三蔵記集』をはじめとする諸経録、『高僧伝』、『続高僧伝』等を精究する必要があります。これはアルバイト的な手伝いとしての仕事ではなく、常に自分の仕事として責任をもって自主的に取り組んだものです。そのために後で「菩提達摩の二入四行説と

金剛三昧経」(昭和二十九年)、「漢訳中阿含と増一阿含との訳出について」(昭和三十年)、「禅宗成立以前のシナの禅定思想史序説」(昭和三十一年)、「偽作の法句経について」(昭和三十六年) 等の論文を発表することができました。最近出版した『経典―その成立と展開』(昭和五十五年) もこれに関係したものと いえます。

その他、達磨禅等の系譜に関するもの、宗門に関係したものにも当然ながら常に留意し、この関係の論文も多少発表しましたが、多くは釈尊の原始仏教やインドの大乗仏教との関連において眺め、道元禅が客観的に見ても原始仏教や初期大乘仏教を受けた正伝の仏法であり、釈尊の仏教そのものであることを論証し強調することに努めてきました。宗門の立場のものとしての『修証義の仏教』『修証義講話』(ともに昭和四十三年) は、ラジオ放送や雑誌連載ものを単行本としたのであるが、以上の立場から述べたものであります。

(本稿は、昭和五十四年十月二日、耕雲館で行なわれた講演テープをもとに、水野弘元先生が加筆されたものである。)